

編集後記

平成 14 年 6 月 15 日から 7 月 13 日まで、毎週土曜日の午後 1 時から人間情報学研究科棟の第 1 会議室において、「美と文化」というテーマで言語文化部と国際言語文化研究科主催の公開講座が行われました。委員長の福田先生をはじめとする 10 名の有志による公開講座では、美に関する多種多様な問題が扱われました。

- 1 「美とはなにか」+ 「美と病」(福田真人)
- 2 表現主義舞踊における「醜の美学」: 「死の舞踊」を中心に(山口庸子)
- 3 音楽にとって美とはなにか(藤井たぎる)
- 4 エリザベス時代の言語美意識(山田幹郎)
- 5 近代における女性美の分裂(越智和弘)
- 6 纏足の美から天足の美まで(星野幸代)
- 7 美的規範の成立と変容: 共同主観と個人的関与の関わり(柴田庄一)
- 8 言語、文化と美の測定(木下 徹)
- 9 バークのサブライム論について(長畑明利)
- 10 拒食の歴史と文学(渡辺美樹)

今回もまた、美に関心のある他の教官にも参加いただき、公開講座をベースに『言語文化研究叢書』を発行することになりました。言語文化部は本年度をもって消滅しますが、拡充改組された国際言語文化研究科によって、平成 15 年度も引き続き「都市と言語文化」というテーマの公開講座が開催されることになっています。ですから、順調に離陸した『言語文化研究叢書』が、このまま安定飛行を続けることは間違いありません。私たちは、『言語文化研究叢書』を公開講座とタイアップさせることにより、研究機関だけでなく一般社会に対しても、今まで以上に充実した形で貢献できるようになるはずです。

「美の本質は端的な完全性であり、完全性の直感的な知覚は、その見事さに対する感嘆の念もしくは快感情によって示される」と、佐々木健一氏は『美学辞典』(東大出版会)の中で書いておられます。これは数ある美の定義についての最大公約数だと言えますが、確かに美ほ

ど多様性を持ち、その定義がむずかしい概念も少ないでしょう。「美はそれを見る目の中にある」「Beauty is in the eye of the beholder.” という諺がありますが、美意識とは非常に主観的なものであり、絶対的な基準があるとは思えません。いくら美について議論してみても、万人を説得できるような結論に至ることはないかも知れません。にもかかわらず、人間は誰もが美については一家言を吐かずにおれないようです。それほど、美というものは私たちの心をとらえ、真や善のように私たちを拘泥させてやまないのです。『言語文化研究叢書』第2号に掲載された10本の論文は、そうした美の神秘を十分に解き明かしてくれていると思います。

『言語文化研究叢書』の編集と発行は国際言語文化研究科・広報委員会の活動の一環として行なわれています。情報公開のために『叢書』には電子版 <<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/sosho/sosho.html>> もあり、そこでは掲載論文をPDFファイルで読むことができます。それぞれの執筆者には電子メールなどで忌憚のない御意見をお聞かせいただければ幸いです。最後になりましたが、編集子の突貫工事で残った編集上の綻びを丁寧に指摘してくださいました藤井先生には、改めて心から感謝いたします。

2003年2月 名古屋にて M.M.